

令和3年産 果樹情報（第1号）

令和3年4月14日
宮城県大河原農業改良普及センター

1 気象経過

- ・ アメダス白石地点の平均気温は、1月が -0.1°C で平年より 1.2°C 低く、2月が 2.6°C で平年より 1.2°C 高く、3月が 7.5°C で平年より 3.2°C 高く経過しています。
- ・ 仙台管区気象台令和3年4月8日発表の1か月予報(4月10日～5月9日)によると、向こう1か月の気温は、平年並か高くなる見込みです。

2 果樹作況調査ほの生育状況

- ・ 大河原管内の果樹作況調査ほにおける樹種ごとの発芽開花状況は、気温が平年より高く経過しているため、各樹種の生育は平年より9～12日早い状況です(表1)。
- ・ 生育に合わせた病虫害防除を実施するとともに、人工授粉も計画的に行うことが重要です。また、開花期前後は凍霜害の危険が高まるので注意と対策が必要です。

表1 発芽～開花状況

樹種	地点	品種	発芽期		展葉期		開花始		満開期		落花期	
			本年	平年	本年	平年	本年	平年	本年	平年	本年	平年
りんご	白石・郡山	ふじ	3/22	3/30	3/31	4/9	-	4/26	-	4/30	-	5/6
		幸水	3/22	4/2	4/7	4/18	4/13	4/22	-	4/25	-	5/4
なし	角田・豊室	豊水	3/20	3/31	4/3	4/15	4/10	4/19	4/13	4/23	-	4/30
		幸水	3/25	4/5	4/12	4/21	-	4/25	-	4/28	-	5/6
	蔵王・高木	幸水	3/25	4/5	4/12	4/21	-	4/25	-	4/28	-	5/6
		豊水	3/23	4/3	4/9	4/17	4/12	4/23	-	4/26	-	5/5
もも	丸森・舘矢間	あかつき	3/18	3/26	4/5	4/17	3/31	4/11	4/5	4/17	4/12	4/24

3 樹種ごとの管理

(1) 各樹種共通

イ 凍霜害を受けた場合の対策

- ・ 日本なしやりんごでは、4月8日から12日にかけて最低気温が 0°C 以下となり、凍霜害の発生が確認されています。
- ・ 凍霜害を受けた場合は、晩霜の危険がなくなり、結実を確認した後に摘果します。また、凍霜害を受けた果実はサビ果、奇形果になりやすいので、仕上げ摘果は障害の程度が明らかになった後に行います。
- ・ 結実不足の園地では、着果した果実はできるだけ残し、徒長枝は取り除いて暗い日陰を作らないようにします。
- ・ 被害が甚大な園では果実肥大促進を目的にした追肥は必要ありませんが、翌年の収穫に向けて必要な病虫害防除は確実にを行います。

ロ 人工授粉の準備

- ・ 花粉採取のため摘む花は、開花後で葯が開く直前のものを集めます。未熟なつぼみや降雨後に採集した花は、開葯するまでに変質して良質の花粉が得られなくなります。
- ・ 集めた花は詰め込まず、蒸れないように気を付けます。
- ・ 貯蔵花粉は、発芽検定を行い、石松子と混合する割合を決めます(表2)。その日に使うだけの分量を冷凍庫から取り出し、使うまえに常温になじませてから使用します。

表2 花粉の希釈倍数（容量比）

花粉発芽率	やく付き花粉	石松子
81%以上	1	4
80～70%	1	3
70～50%	1	2
40%	1	1
30%	1	0
20%以下	花粉の活力が低いいため使用しない。	

ハ 人工授粉

- 人工授粉は、天気予報を確認して気温が15℃以上になる日に行い、2時間以内に降雨があった場合は再度授粉します。

ニ 花粉の貯蔵方法

- 翌年使うために貯蔵する花粉は、やくつき花粉と同量のシリカゲル等の乾燥剤とともに密閉した容器に入れて-20℃以下の冷凍庫に貯蔵することが必要です。湿気を吸うと発芽率が大きく下がるので要注意です。

(2) りんご

イ 予備摘果

- ガク立ちまでは、えき芽や不良着果位置（概ね30cm以上の長果枝先端、骨格枝上の逆さ実となる位置など）にある果そうを全摘果しましょう。
- ガク立ちが確認できる満開後10日頃以降は、頂芽1果そうに1果（可能な限り中心果）を残し、満開後30日までに終わるようにします。

ロ 摘果剤の利用

- 摘果剤としてミクロデナポン水和剤85の1,200倍液を使用する場合は、満開後1～4週間に、成木園では10a当たり350～400Lを目安に、展着剤を加用して、果実及び果そう葉によく付着するように散布します。本剤を使用する場合は、りんご品種により摘果効果が異なるので、薬害や過剰摘果とならないよう、使用上の注意事項をよく確認して下さい。

表3 農薬の使用法 令和3年4月7日現在

作物名	薬剤名	使用目的	希釈倍数	使用時期	使用回数
りんご	ミクロデナポン水和剤85 (NAC水和剤)	摘果	1,200倍	満開後1～4週間	2回以内

ハ カルシウム剤の果面散布

- ビターピットやコルクスポットの発生しやすい園地では、幼果期以降にカルシウム剤の散布を3～5回行うと発生が軽減されることがあります。

ニ 病虫害防除

- ハダニ類
園地内をよく観察し、発生初期に殺ダニ剤の散布が必要です。
- 褐斑病
昨年発生の多かった園地では、5月に効果の高い殺菌剤を散布しましょう。

(3) 日本なし

イ 予備摘果

- ・ 凍霜害の影響が大きい新高などでは、結実を確認後、摘果を行います。
- ・ 翌年の着果量への影響が大きいので、結実状況や果実の障害等をよく確認し、着果の多い園地から摘果を始めます。

ロ 仕上げ摘果

- ・ 凍霜害を受けた果実はサビ果、奇形果になりやすいので障害がはっきりしてから行います。
- ・ 満開後 45～50 日頃までに、果そう葉が多く、果形の良い大きい果実を残します。
幸水：目安は短果枝が 3 果そうに 1 果、長果枝が 2～2.5 果そうに 1 果
豊水：目安は 4 果そうに 1 果

ハ 新梢管理（芽かき）

- ・ 凍霜害を受け着果量が少なくなると樹勢が強くなるので、新梢管理を徹底します。
- ・ 不要な芽を整理するため、主枝や亜主枝の背面から発生した芽や、太い切り口から発生した上向きの強い芽は早めにかきとります。

二 病虫害防除

・ 黒星病

開花後は果そう基部病斑からの胞子飛散が主になり、濡れ時間が 20℃のとき 9 時間あると感染が成立するといわれています。果そう基部病斑のある果そうは除去し、園地外で処分します。果そう基部病斑のある果そうは、りん片が脱落しにくいので見つけるポイントとなります。

- ・ アブラムシ類、ニセナシサビダニ、アザミウマ類
5 月下旬の発生初期に防除を行います。

(4) もも

イ 予備摘果

- ・ 摘らいや摘花を実施しなかった場合や摘らい程度が弱く着果数が多い園地では、予備摘果を実施します。なお、着果量が少ない場合は、仕上げ摘果から行います。

ロ 仕上げ摘果

- ・ 満開後 40 日～50 日頃に実施し、新梢の生育に応じて着果量を加減します。
- ・ 双胚果や核障害の発生が多い場合は、仕上げ摘果時点での着果量をやや多めとし、障害が明らかになる硬核期終了後に修正摘果で着果量を決めます。
着果量の目安：長果枝→1～2 個、中果枝→0～1 個、短果枝→0～1 個

ハ 病虫害防除

・ 灰星病

花腐れや花腐れから進展した枯れ枝は切除し、園地外で処分します。

・ ホモプシス腐敗病

枝折れが見られる場合には見つけ次第切除し、園地外で処分します。

・ せん孔細菌病

1 年枝の枝皮部の黒変や新梢葉の生育不良を目安に、一次伝染源である春型枝病斑は切除し、園地外で処分するとともに、雨を伴う強風が吹いた後はただちに防除を行います。